

冬華のなんてこない受難

※ゲームクリア後にお読み下さい

著者…なかひろ



私こと秋華冬華は、Sであることを自覚している。

こでいいうSとはSモールサイズの意味ではなく、サディズムの意味だ。私の胸はべつにSモールじゃないし！どちらかという大きいほうだろう。えっへん。話が脱線した。とにかく私はSであり、その証拠として、一時は彼氏である名瀬陽平を執事として扱っていたくらいなのだ。

だけど、最近はどうも強気に出られないことが多い。私らしくもない。陽平がイジワルばかりしてくるから悪いんだけど、自分もだんだんそれに乗せられて、気がつけば受け身になってしまふのだ。私はMじゃなくてSなのに！サイズじゃなくてね。

というわけで、今日は彼とのデートの日。日頃の仕返しとして虐げてあげるわ！待ち合わせ場所であるアキバ駅前で、私はひとりガッツポーズを取った。

二時間が経過した。

「陽平、遅い……」

私は泣きそうになっていた。

「デートの約束、忘れられてる……？ それとも、すっぱかされた……？ 陽平、私のこと嫌いになったのかな……ぐすっ……」

「冬華、お待たせ」

陽平が涼しい顔で手を挙げながら登場した。

「陽平のバカバカバカバカ……」

「なんでかはか叩くんだよ！」

「だって陽平、来てくれないと思ったんだもの！」

「い、いや、時間とおりに着いてるだろう？」

「もう夕方4時だよの！」

「アキバ駅で4時に待ち合わせしようって、約束しただろう？」

「え……」

昨日もらったメールを読み返してみると、たしかにそうになっていた。

……私、4時を14時と勘違いした？

「冬華……。おまえ、何時にここに着いたんだ？」

「さっさちやうど着いたところよ」

「そうは思えない反応だったんだが……」

「ていうか、なんでせっかくのデートなのに夕方からのよ！ もっと早く陽平に会いたかったのに！」

「こ、ごめん。ちよつと都合がつかなくてさ」

「バイとかあったなら、しょうがないけど……」

「いや、女友だちとの予定が入ってて」

「そう。それじゃあそろそろ向かいましょうか、ドリルが売っている店に」

「なにに……？」

「オスメのドリルがあるのよ。きっと陽平も気に入ってくれると思うわ」

「どういことだよ……？」

「教材じゃなくて、建設機械のドリルのことよ」

「それはどうだろうけど……」

「あなたの穴という穴にドリルを突っ込んであげるわ。もちろん回転しながらね」

「俺の後ろの初めてがついに開店してしまうのか……回転だけに」

「迎え入れる覚悟はできたようね」

「できてねえよ！ ちゃんとデートらしいことしようぜ！」

「デートらしいこと……たこえは？」

「今日は冬華につきあうよ。待たせたお詫びに、なんでもするぞ」

「そ、そうなの？」

思いがけず、彼を虐げるチャンスが到来した。私はここぞとばかりに言う。

「じ、じゃあまずは……腕組んで、歩きたい」

「仰せのままに、お姫さま」

私はおっかなびつくり、彼の腕を取り、身体を寄せた。

「えへ……」

陽平のぬくもり。あたたい。まだ彼は付き合っただけだから、こういうことをするのは気恥かしい。きっと陽平も恥ずかしているはずだ。やっ！

うん、満足した。陽平、今日はこのくらいで許してあげる。あとはもう、あなたの好きなこと、してあげるね。え、エッチなこともしようがないからしてあげる。

寛大な私に感謝しなさい。でも勘違いしないでね、私はSなんだから！